

# 人権だより

No. 218

2015. 9. 18

宇和島南中等教育学校  
人権教育部

## 「分かりたい」

人権教育部 大塚 美絵

4年生と一緒に、鷺田清一さんの『聴くということ』という教材で勉強しています。その中に、「『聴く』というのは相手に関心を持って、相手の言葉をきちんと受け止めることである」というような内容があります。また、「自分について話すことは、語り手が自分を無防備にすること」であり、「本当に苦しいことについて、人はなかなか話したくないし、忘れてしまいたいこともある」のだから、「聴く人は、言葉を継ぎ足したり、横取りしたりしてはいけない」とも書かれています。つまり、話す側が語れるようになるまで「待つ」ことが大切だということです。さらに、「hospitality (= 歓待・他者を温かく迎えること) においては、聴く人の素質ではなく、その人の態度や生き方が問われている」とも述べられていました。

随分前の話になりますが、口下手な学生だった私は、語れば語るほど他者の誤解を招き、もう誰とも話をしたくないと思ったことがあります。「話してみて。」と声を掛けてくれた友人にも、「どうせ分からんやろ。」とひねくれた返事をしたのですが、その友人は怒りもせず、「確かに分からんかもしれんけど、分かりたいとは思うよ。」と言ってくれました。

「分かりたい」。それこそが「聴く」姿勢なのだと思います。そして、その姿勢は、「よりよく生きる」ことにもつながっているはずです。自分一人で生きていける人はいません。誰しも、周囲の人やものとのつながりを必要とします。そのとき、知識や経験は大切ですが、それだけにこだわり続けるのは考えものかもしれません。偏見や先入観を交えず、まっすぐに対象に向き合うこと、ありのままの姿を認め合うことが「分かりたい」ということなのだと思います。とはいえ、いまだに余裕がなくなると、聴くことも語ることも、「どうせ……」とか「もう、ええわ」と思ってしまうことがあります。そんなときは、「どんな問題も逃げ切れないほど大きかったり難しかったりはしない。(=NO PROBLEM IS SO BIG OR SO COMPLICATED THAT IT CAN'T BE RUNAWAY FROM!）」(『スヌーピー』チャールズ・モンロー・シュルツ作) と思い直して、前を向いていこうと思います。



## 人権委員の声

相手を「理解する」のではなく、「理解しようとする」。この姿勢が、相手のことを本当に理解することなのではないかと感じた。偏見や先入観だけで人を判断するのではなく、まっすぐに相手と向き合うことができたなら、よりよい人間関係も作れるのではないかと思う。 (6年1組)

私も以前この教材を読みましたが、「聴くこと」の大切さをついつい忘れがちです。友達と話し合ったり、何か問題が起きたりしたとき、自分の意見を持ち、しっかり話すことは大切です。しかし、前向きに解決するためには、それ以上に、「聴くこと」が大切なのではないのでしょうか。「聴」という文字のとおり、目と耳と心でしっかり人の話を聞くよう心掛けたいです。 (6年2組)

体育祭という大きな行事をやり遂げ、6年生は本格的に受験期に入りました。そんな中、それぞれがそれぞれの悩みを抱えて苦しんでいると思います。友達同士の会話でも、理解を得たいと思っているはずです。聞く態度も含め、「分かりたい」の意識で友達の輪を築きたいと思いました。 (6年2組)

相手の話を聴くときの姿勢によっては、相手を傷付けてしまうことを知り、今までの自分の態度を考えると、良くないと思うことが幾つもありました。これからは聴く姿勢に気を付けて、人とのつながりを大事にしていきたいです。 (6年3組)

体育祭準備の期間、自分が一方的に発言してうまくいかないときもありましたが、民謡を考える際、仲間とお互いに意見を聴くことで、協力して作ることができ、また、皆に振り付けを素直に聴いてもらったので、すばらしい民謡を完成させることができました。「聴く」ということは本当に大切な姿勢です。これからも意識し続けたいです。 (6年4組)

聴く人に求められるものは、語り手を受け入れる態度だと思います。もちろん、語り手が配慮すべきこともたくさんあると思いますが、会話に限らず、お互いに相手とどのような姿勢で向き合っていくかを少し考えてみるだけでも、関係性を良い方向へ変えられると感じました。 (6年4組)

## 人権委員の声

私はこの話を読んで、母と進路のことについてもめていたときのことを思い出しました。夏休み前くらいからずっとそのことで話し合っていたのですが、どうせ分かってもらえない、そう思ってしまい、本当の自分の気持ちも話せず、母の話も素直に聞くことができませんでした。しかし、9月になり、進路決定への焦りとたくさんの人に背中を押してもらったことで、母と落ち着いて話すことができました。そのとき、まず自ら相手のことを「分かりたい」「理解しよう」という気持ちが大切なのだと感じました。これからは、このことを通して感じ、考えたことを忘れず、生活していきたいです。 (6年3組)



(4年3組)

## 人権作文について

前期生のみなさん、夏休み中の課題として人権作文を書いていただき、ありがとうございました。提出された作品総数457編の内訳ベスト3は、「子ども(いじめや児童虐待)に関する問題をテーマとした作品」(168編)、「戦争や平和をテーマとした作品」(97編)、「差別問題一般をテーマとした作品」及び「人権の尊重をテーマとした作品」(各々54編)でした。

体験を踏まえて書かれた作品の中には、かつて自分自身が味わったつらい思いや、小学校の修学旅行で訪れた広島平和記念資料館や長崎原爆資料館で受けた語りきれない衝撃を、言葉にしてくれたものがたくさんありました。そして、見て見ぬ振りをしてしまったことに、後悔を覚えている人もいました。思い出させて苦しい思いをさせてしまった人もいるかもしれませんが、表現できるということは、きっとそれを乗り越えたり、自分の成長の糧としたりしているということ。実際、「こんなことがありました」という思い出話にとどめず、「今、何ができるのか」「自分(たち)は、これからどうすればいいのか」という前向きな意見を述べる人が多く、みなさんのたくましさも感じました。

戦後70年という夏が過ぎ、「人権」についてメディアが取り上げることもやや少なくなった感は否めませんが、これからも、機会を見つけては「よりよく生きること」を考えつつ、お互い人権意識を高めていきましょう。